二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

新 呪い屋 零2
淫妖街

小説 斐芝嘉和
挿絵 高浜太郎

プロローグ 007
第一章 兆し 009
第二章 拝み屋・疋田常吉 023
第三章 囚われの巫女 038
第四章 淫蟲 071
第五章 欲望という名の列車 081
第六章 陵辱交差点 116
第七章 双華競艶 151
第八章 復讐の淫謀 191
エピローグ 247

登場人物紹介

Characters

佐々木零（ささきれい）

「呪い屋」の通り名で知られる凄腕の呪術師。十代半ばの容姿をしているが、年齢不詳。偽悪趣味の皮肉屋。

羽賀御影（はがみかげ）

羽賀大社の跡取り娘。星辰学園在籍時は、羽賀退魔社を組織しＯＲＧＡＮＯＮと戦った。

陳青龍（ちんせいりゅう）

秘密結社「ＯＲＧＡＮＯＮ」の幹部。零たちの敵。

一ノ瀬（いちのせ）ジョスリン

古代密教を伝える一族の子孫。警察呪術大学高等部一年生だったが、陳に懐柔されてその部下になった。

双葉（ふたば）六花（りつか）

小柄童顔の少女。ジョスリンと同じ経緯で陳の部下となる。

美島（みしま）加世子（かよこ）

長身の大人びた眼鏡娘。ジョスリンと同じく陳の部下に。

これまでのあらすじ

「呪い屋」と呼ばれる凄腕の女呪術師――佐々木零。

彼女は星辰学園高等部に通う傍ら「羽賀退魔社」の一員として、羽賀の跡取り娘・羽賀御影、強力な霊媒の能力者・宮内早苗とともに、人に仇なす怪異を討つべく活躍していた。

そして彼女たちは、この世の混乱と破壊を目論む秘密結社「ＯＲＧＡＮＯＮ」との熾烈な戦いに巻き込まれたものの、辛くも勝利を収めたのだ。

――そして数年が経ったある日。

フリーの呪術師として活躍する零の元に、新たな依頼が舞い込んだ。

一ノ瀬ジョスリンという女生徒を救出するため、呪術災害に見舞われた学園内に潜入した零。そこで待ち受けていたのは、かつて死闘を演じたＯＲＧＡＮＯＮ幹部・陳青龍だった。陳はジョスリンをはじめとした女生徒たちを懐柔していたのだ。

彼らに囚われた零は陵辱され、彼女を不死身の存在たらしめていた呪術疑似人格――ＺＥＲＯを奪われてしまう。

そして今、力を失った少女退魔師に敵の追撃が始まろうとしていた。

『第五章　欲望という名の列車』より

ハッと身を強張らせた背に、男の手が滑り込む。ボタンを外されて弛んだブレザーがずれ上がり、シャツの上から背筋を探られて――プツ。

ブラジャーのホックが外された。メロンほどもある美乳が締めつけから解放されてユサッと揺れ、喰い込むほどきつかったカップを振り払ってしまう。

トクン、トクン、トクン。

カップから解放された乳首が大きく膨らみ、もどかしい疼きを孕んで拍動し始めた。黒シャツを貫きそうなくらいに突き上げて、前に立った男の胸に身体が寄れば真っ先に触れる。閃く快感を嫌って身を離せば、張り詰めた双球がユサリユサリと揺動し、感度の増した乳頭がシャツの裏地にしごきまくられてしまう。

「ほら、駅に着くぞ。声を出すなよ」

「くっ⁉　ち、チク、ショオォォ……！」

呻いているうちに列車は駅に滑り込み、間延びしたアナウンスとともに扉が開く。降車客と入れ替わりに、

「ウソォ、なにソレぇ！」「絶対ウケ狙いだって！」

制服姿の少女たちが五人ほど、無邪気に笑い合いながら乗り込んできた。

（っ⁉　なんで、こんなときに……っ！）

耳の先まで真っ赤に染め、顔を背ける零。扉の傍に一塊になってペチャクチャと喋って

いるうちの三人までが、知り合いだった。恋愛相談とか恋占いとか、他愛もない依頼をしに来た少女たち。まだ汚れを知らぬ彼女たちの傍で、痴漢に身体をまさぐられているなんて――知られたくない、気づかれたくない。

「お友達か？　可愛い娘たちじゃないか」

猫目の少女が身を強張らせたことに気づき、背後の痴漢が小さく笑った。

「ちょうどいい、呼んで来よう。なにをされているか見てもらうんだ」

「や、やめ……ろぉ……」

中年サラリーマンの胸に頬を擦りつけ、掠れた声で言うと、小さなハサミを持った手がシャツの中に挿し込まれた。黙っていろよ、と耳元で凄んだ男が、手探りでブラの肩紐を――プツン、プツン。

（く……クソッタレ……っ！）

悔しさに歯噛みしているうちに、体温の染みついた下着を抜き盗られた。火照った乳肌に直接貼りつくシャツの裏地。いつもより一回り大きくなった双球は伸縮する薄布に抱き締められ、少し身じろぎするだけでキュッキュッと揉み込まれる。

「ちょっ、まっ……あぅっ⁉」

シャツの裾から侵入してくるいくつもの手。ずっしりと重い巨乳の下半球が硬い指に突き上げられ、汗にぬめる乳谷が分厚い掌に撫でしごかれる。

キュイ！

傍若無人に揉み回される乳丘の先、痼り勃った左の乳首が、直接抓まれた。存在しない薄皮を剥くように、先から根元へ何度も何度もしごかれる。

「くぅ、ふ、くぅぅぅ……っ！」

シャツに突き出た右の突起は黒布の上から頭を押さえられ、クニクニ、クリクリ、と捏ね回されて、鋭いスパークが弾けた。

（だ、ダメだ、感じたらダメだ！）

感じれば経絡に気が巡り、巣くった淫蟲を活気づかせてしまう――なのに、愛撫を受けた胸乳には甘い気持ちが膨れ上がる。弄られた両の乳首の間には心地よい電流が往復し、意識が白く痺れてくる。

じゅわ、じゅわ、じゅわ……。

乳房が気持ちよくなるにつれ、触れられていない淫裂が新たな蜜を滲ませた。捻れる背筋を伝い、剥き出しの秘部へ悦びの波が流れ込んできたのだ。淫蟲の繁殖した膣穴がこらえがたくウズウズする。乳首とクリトリスが直結してしまったように、胸先を弄られると股間の肉突起が痛いほどに勃起してしまう。

「なんだよ、いまにもイきそうな顔だな」

「……っ⁉　ち、違うっ！」

ハッと我に返って小さく叫んだのに、昂奮した男たちはもう、聞いていなかった。
「焦るなよ、これからがイイんだぞ」
「く……っ⁉　あぁクソ、やめろぉぉ……！」
パンティのレッグホールに潜り込んだ太い指が、尻の柔肉をしごきつつ、右から左へ滑る。反対側の端から顔を覗かせた指先は鈎に曲がり、薄布を引っかけて、上に。
プリッ！
Tバックにされた下着の左右に、弾けるように飛び出す尻房。ほんのりと桜色に染まった柔肌は、男の掌を被せるためにあるような艶めかしい曲面を見せ、男たちの陰で輝く。
「おうおう、いいケツだ。よし、前もしてやれ」
痴漢仲間の囁きに応え、恥丘を守る薄布にも指がかかった。温かな股布が左へずらされ、紅く火照った肉畝がプルン！
（ば、バカ野郎……ッ！）
割れ目の縁から流れ込む、冷たい空気。やめろ、と叫びたいが、傍には知り合いがいる。気づかれたくない——溢れそうになった声をこらえた零は、前の男に額をぶつけ、必死に身体を揺すって逃れようとした。
「ジッとしてろって。すぐに済むから」
グイッ！

太い腕に掬われて腰の高さまで引き上げられる膝。開いた太腿の側面に喰い込むストッキング、無防備に晒される股間。左に傾いた身体は、鼻の下を伸ばした男たちにしっかりと抱き留められる。

（チィッ！　なんて格好だ、畜生……ッ！）

無理矢理広げられた両腕、しなやかに捻れた腰。これではまるで、男たちの玩具だ。片脚を吊り上げられているせいで股間はパックリ開き、大切な場所は見知らぬ男たちのたくさんの手指に弄り回され――ブラを奪われ、黒シャツに乳首を浮かせた胸の双球も、武骨な指に群がられ、ムギュムギュと揉み歪められている。

「声を出すんじゃないぞ。お友達に気づかれちゃうからな」

小さな声で釘を刺してから、痴漢たちは秘部に伸ばした指をいやらしく動かし始めた。淡い茂みで遊ぶ指、肉畝に這い上がってくる指、汗ばんだ会陰部をしごき、肛門の傍を行き来する指――土手縁を引っかけられて割れ目を開かれると、蜜まみれの粘膜花弁がプリッと飛び出した。蠢く指がビラビラに触れると、

「うぅっ⁉　く、うぅうっ⁉」

高波が背を駆け抜け、はしたない声が漏れてしまいそう。

（あぁ、クソ、淫蟲が……っ！）

芋虫のように這い回る指に呼応して、蜜壺の奥にあったざわめきが柔肌の裏まで這い上

がってきた。愛撫されている秘部の裏側で盛んに身をくねらせ、甘い気持ちを増幅するイトミミズの群だ。

じゅわ、じゅわ。

羞じらう理性を裏切って、粘膜花弁に甘酸っぱい蜜が滲む。

「なんだ？　もうネチョネチョじゃないか」

「指に絡みついてくる。いやらしいオマ○コだなあ」

「や、めろ、ぉぉ……はぅっ⁉　く、うぅうっ！」

チョン！　チョン！

肉割れの縁で密かに痼っていたクリトリスを、硬い指先で突かれた。弾ける激感。

バネ仕掛けのように仰け反った零は慌てて唇を噛み、喉の奥から迫り上がってきた甘い鳴き声をこらえた。ギュッと瞼を瞑り、美眉を悩ましげに寄せて――朱唇を噛む皓歯、緊張に強張る紅い頬。髪の生え際にはフツフツと真珠のような汗の珠が浮き、細い身体は小刻みに震え――絶頂を必死にこらえているような姿。男の胸にしがみつき、天に舞い上がるような姿勢で伸び上がった栗色の髪の少女に、男たちが昂奮する。

「もうすぐ終点だ、そろそろ本番にしようか」

耳元で囁かれた零は、ビクッと首を竦めた。

（ほ、本番？　まさか……ウソだろっ⁉）

焦る理性とはうらはらに、肉壺がグジュン！　と淫らに捻れた。膣襞に棲み着いた淫蟲が、ペニスを求めて暴れ出したのだ。火の柱が立ったように熱くなる秘部。揺らめく淫炎に炙られて、粘膜器官が狂おしく疼く。

ヒトに見られていることなどどうでもいい、指を突っ込んで掻き回したい。太くて長いペニスで、ジクジクするヒダヒダを激しく磨り潰して欲しい――。

「へへ、イイ匂いがしてきた。お嬢ちゃんも昂奮してるんだな」

耳裏にジワッと滲んだ香汗を嗅いで、背に貼りついた男が笑った。

「く、そ……あっ⁉　や、やめ……あぁっ！」

グリ、グリグリ！

太腿に擦りつけられる熱い塊。猛々しく怒張したペニスだ。片脚立ちになった下半身に、右からも左からも、前からもうしろからも、焼け木杭（ぼっくい）のような肉棒が押しつけられる。尻肉が揉まれ、内腿がしごかれた。前に立った男は己のペニスを握り、硬い切っ先を蜜に潤んだビラビラにねじ込もうとする。

（やめろ、やめろぉっ！）

払い除けたいのに、手首を掴まれた手は左右に開いたまま。腰を揺らそうにも、傾いた身体を男たちに支えられているため、わずかに左右に捻ることしかできない。

こんな場所で、こんな連中に犯されたくない――歯軋りした零は、覚悟を決めて己の身

体を呪った。

ゾクゾクッ！

背筋に広がる甘い波紋。尻や乳房が煮え立つように熱くなった。経絡を走り抜けた気に反応し、淫蟲が激しく踊り出す。柔肌に滲む香汗、全身に湧き上がる焦れったい疼き。

「ン？　アレ？　なんだコレ、クソ、穴が……クソッ！」

零の前に立った男が悪態を吐き、握った男根をグリグリと擦りつけてきた。呪いを受けた肉穴がしっかり口を閉ざしてしまったため、表面に擦りつけることしかできないのだ。

（ざまぁみろ……くっ⁉）

見下そうとした猫目が、不意にハッと見開かれた。掌に押しつけられる肉塊、尻割れにはまり込む男根。

「お、お前が悪いんだぞ、こんないやらしい匂いをさせているから……」

全身から漂い始めた牝香が、痴漢たちを昂らせてしまった。左右に引き伸ばされた腕にも手の甲にも、ストッキングに包まれた太腿にも冷たい空気に晒された尻房にも、滾る亀頭が擦りつけられる。

「ふぁ、く、うぅぅ……っ！」

喉の奥から込み上げてくる甘い吐息。恥ずかしいのに止められない。増殖した淫蟲のせいで、牡エキスを擦り込まれた場所がすべて性感帯に変化してしまったのだ。

（く、クソ……畜生ッ！）

悔しいが、気持ちいい。男の鼻息が吹きかかるだけで髪の先まで電気が走り、ギュ、ギュ、と揉み潰される乳房には沸騰した溶岩が湧く。煮え蕩ける意識、浮き上がりそうになる身体。怒張ペニスのたくましさに胸が高鳴り、呪で閉ざした秘部に淫液が溜まる。

「お前らだけずるいぞ、俺にも犯らせろ！」

列車の揺れに紛れて、昂奮した男たちが身体をさらに密着させてきた。切っ先を上に向け、太腿に押しつけられる何本もの男根。

（あぁ、クソ……脚が……太腿が……ッ！）

黒い薄布に締めつけられた柔肉が武骨な裏筋に前後左右から揉み込まれ、骨の髄まで刻み込まれる淫悦。膝から力が抜け、爪先立ちになった左脚がプルプル震え始める。

このままでは拙い、呪を打って状況を変えなければ――ピンクに染まった意識で考え始めた矢先、

「ンむっ!?　む、むぅうっ!?」

いきなり頭を抱えられ、唇を奪われた。挿入を諦めたサラリーマンが、無理矢理キスをしてきたのだ。口唇粘膜を襲う生々しい感触。懸命に口を閉ざして拒むのに、しなやかにくねる舌が唇をこじ開け、押し入ってくる。

（な、なんだ、コレ……あぁ、クソ、畜生……ッ！）

歯茎を舐められた途端、甘い感覚が口一杯に広がった。小刻みに震える舌先で皓歯をせせられると滑らかなエナメル質に電気が走り、心地よい痺れが顎の骨に染み渡る。淫らなイトミミズのせいで、こんなところまで性感帯になっていた。

「むぅふぅぅ、む、むぅぅぅ……ぅうッ!?」

ニチュ！　グチュ！　ニチュ！

零の唇を奪った男が腰をリズミカルに振り、剛直に磨り潰される粘膜花弁。カァッと燃え上がった淫熱は膣膜を伝い、肉芯にまで染み渡る。

（う、浮く、浮いて……うぅう……っ！）

股間に生じた快感が、男根を擦りつけられた手や太腿の肉悦と混じり合い、大きなうねりとなって背を駆け上がってきた。煽られて舞い上がる意識。

激しい愛撫に乳房が蕩け、荒々しいディープキスに口腔粘膜が燃える。男に触れられた場所はどこもかしこも気持ちよく、

（あぁ、動く……動いち、まうぅ……ッ！）

揉みくちゃにされた身体が淫らに腰を振り始めた。

「へへ、イきそうか？　イきそうなんだな？」

頭上から降りかかる生温かな鼻息。肉アケビに擦りつけられた肉棒が速度を増し、蜜の滴を飛ばしながら上下に激しく律動して――チョン！

『第六章　陵辱交差点』より

老呪術師の声に抵抗する御影の声は、弱々しく震え、艶めかしく響いた。外からは拝み屋の術に操られ、内側からは淫蟲に追い立てられて、羞恥心を維持するのも難しくなっているのだろう。

「ごめんなさい、佐々木さん。いまの私では、正田さんの術に逆らえない……だから、耐えて、く、ださい……」

ちょろん！

首筋に触れる生温かなモノ。御影の舌だ。

「ふぁうっ⁉　や、やめ……あぅぅっ！」

生温かく濡れた舌が、うなじをせせりながら舐め上げる。呪力を失っても知識はあるから、経絡を的確に責められた。ほんのわずかな接触なのに、気の流れが乱され、いやらしくくねる舌が柔肌を這うたび、頭の中に桃色の靄が噴き出す。

「お？　レズプレイか？　いやらしいお嬢様だ」

「み、見ないで……うぅ」

ぴちょ、ぴちゃ、ぺちょ。

悶える猫目の少女をうしろから抱き締めた黒髪の美女は、羞じらう言葉とはうらはらにうっとりと頬を弛め、火照るうなじに舌を這わせた。

襟足をくすぐる甘い吐息。頸椎を愛おしむように繰り返されるキス。

潰れた乳房が気持ちいいのか、御影は零の身体をギュウッと抱き締めてしきりに胸を擦りつける。バラの花びらに似た唇は呪い屋の首筋に音を立てて吸着し、しなやかにくねる紅い舌は首筋から耳の裏までピチャピチャ、ニチョニチョと舐め回す。

「やめろ、み、か、げぇっ！」

うしろから抱き締められた零は伸び上がるように身を反らせ、懸命に腰を捻った。うなじに刻み込まれる淫悦から逃れようと必死になっているのだが、拝み屋の術に操られているため思うように動けない。

「ごめんなさい、お願い、耐えて……」

ムニュグニュムニュ。

左右から寄せ合わされ、細指に揉み歪められる双球。擦れ合う乳谷に甘い気持ちが溜まり、シャツを突き上げている勃起乳首がキュウ、キュウ、と締めつけられるのは、絡みついた薄布が沈み込む細指に引っ張られるせい。

払い除けたいのに、両手は股間に伸びたままだった。御影と同じく、呪い屋も操られているのだ。胸に溢れる悦びを伝えるようにミニスカートを捲り上げ、ストッキングの上から秘部を弄りまくる細指。揉みくちゃにされた肉畝は火傷しそうなほど火照り、割れ目から蜜が溢れ出していた。白魚のような指が妖しく蠢くたび、擦れ合う媚肉がニチュ、クチュ、と小さな粘音を立てている。

（ダメだ、クソ……こんなことをしていちゃ、ダメだ……）

遠巻きにしているＳＡＭＰは、なにを考えてこの光景を見ているだろう。自分たちが女神のように信奉している羽賀のお嬢様が、男たちの手先となり、猫目の少女を背後から抱き締め、公衆の面前で辱めているとは――やめなければ、と思うのに、淫呪に冒された御影は柳のようにしなやかに捻れ、背にぴったりと密着している。身体を揺すって振り払おうにも、うなじにキスをされ、乳房を揺するように揉み回されると、膨れ上がる肉悦に意識が蕩けてしまう。

「どうです、お嬢様。姐さんのオッパイは揉み甲斐があるでやしょう？」

「そ、そんなこと……あっ⁉　や、やめ……ごめんなさい佐々木さん、指が、指が……」

正田に拝まれた御影の指が、ブレザーのボタンを外し始めた。上のほうからプツリ、プツリ――。

（く、クソ……っ！　畜生……っ！）

喰い縛る歯に力が入らない。胸の締めつけが弛むにつれ、乳房にわだかまっていた疼きが少しずつ癒えていくのだ。恥ずかしいのに気持ちいい。溢れる吐息を止められない。

胸元に蠢く細指が次第に下へと降りていき、最後のボタンに取りかかったとき。

プルルン！

弛んだ前身頃を押し退けて、豊満な膨らみが弾けるように飛び出した。

「ふぁあっ⁉」

両乳に、爆発的に膨れ上がる悦感。上下に跳ね踊る柔肉が自らの重みによって芯まで揉み込まれる。大きな美乳を支えるのは伸縮性に富んだ黒い薄布一枚。ユサユサと揺れる双球全体がシャツの裏地にしごきまくられ、乳肌が熱い痺れに包まれた。

「お？　でけぇだけじゃなくって、形もいいな」

「み、見るな……見るなぁっ！」

腰を屈めて覗き込んでくるチンピラたちに、猫目の女呪術師は耳の先まで真っ赤になった。瑞々しい弾力を示して揺れる乳房にブラジャーはない。痴漢に盗まれてしまったからだが、ここにいる男たちには関係ないこと。瞳に獣欲の炎を燃やした若い牡たちが、黒布を突き破らんばかりに勃起した肉豆を見つけたら……。

「くっ⁉　あ……やめろ御影……クソぉっ！」

自由にならない身体を懸命に丸めようとしていたのに、背に貼りついたお嬢様に羽交い締めにされ、逆に引き起こされてしまった。しなやかに反り返る背筋、見下ろす男たちに向けて掲げるように突き上げられる美乳。

「おい見ろ、乳首が立ってるぞ！」

「ノーブラか？　やっぱり淫女だったんだな」

胸先に突き出た小さなポッチを見つけた男たちは、零が恐れていた通りの反応を示した。

ニヤニヤと笑み崩れ、武骨な指を乳房の先に伸ばして――キュッ！
「ふぁうっ⁉」
乳肉を貫いて脳髄まで走り抜ける鋭い電撃。肉釣鐘には甘い痺れがじわじわと広がり、シャツに愛撫されていた柔肌がカァッと燃え上がる。
（ち、ちく、しょぉぉ……！）
胸の悦びを必死に押し隠したつもりなのに、
「へへ、見ろよこの顔。乳首弄られてよがってやがる」
耳の先まで赤らめ、猫目を熱く潤ませていれば、感じていることは丸分かりだ。鼻息を荒げた男が武骨な指をワキワキと蠢かせつつ、黒布に包まれた美乳に手を伸ばしてきた。
「あぅっ⁉　や、やめ……や、うぅッ！」
キュウ！　キュウゥゥ！
左右の乳首が抓られた。ちぎれそうなくらい引っ張られ、吊り上げられる乳房。痛いはずなのに、乳腺を逆流して双球に染み渡るのは心地よい波紋。
淫蟲のせいだ。
経絡を泳ぎ回るいやらしいイトミミズが、あらゆる刺戟を快感に変換してしまうのだ。
「くぅあぁ……うぅ、あぅうぅぅ……！」
乳房を真上に吊り上げられた零は、湧き上がる悦びを少しでも弱めようと弓なりに反り

返った。だが、逃れられない。捏ね潰された乳首から乳芯に向け、激感の針が次々と突き刺さる。乳肉に充満していたもどかしい疼きが爽快感に変化して、まるで氷柱を挿し込まれているような感覚。

「その調子ですぜ、姐さん。いい声だ。もっと聞かせてくだせぇ」

「な、なにを……あっ⁉　く、はぅぅぅンっ！」

ぐちゅぅぅ！

握り潰される肉畝、爆発する淫悦。

正田に拝まれた右手が細指を曲げ、薄布に守られた肉アケビをワシ掴み。震える指の間から垂れるのは搾り出された淫蜜。周囲の空気を淫らに染めて、男たちの獣欲を掻き立てる。

「しっかりしてください、佐々木さん！　気を確かに……！」

悶える猫目の少女を案じて声をかけた御影に、意地悪く笑んだ拝み屋がすかさず手を打ち合わせた。

「せっかく気持ちよくなってるのを邪魔しちゃいけませんぜ、お嬢様」

「な、なにを……あっ⁉　そ、そんな……」

絡みついていた細腕が、零の腋下から抜けた。タイトスカートに包まれた美尻に身体を擦りつけつつ、巫女服の美女が四つん這いに。緋袴の尻が高々と持ち上がり、強制される

犬のポーズ。破れた股間がうしろへ突き出され、緋絹の裂け目に肉アケビが顔を出す。
「疋田ァ！　テメェ、御影になにをさせるつもりだ⁉」
「心配しなさんな、姐さん。おふたりともに気持ちよくなっていただこうって趣向で」
いやらしく笑み崩れた老呪術師が拝んだ手を摺り合わせると、四つん這いになった御影が這い始めた。零の腰に身体を擦りつけつつ正面に回り込み、前を開いたブレザーにしがみついて身を起こす。
膝立ちの姿勢で向き合うふたり。黒シャツを突き上げる美乳と巫女服からこぼれ出そうな美乳が擦れるくらい近い。
（ともに気持ちいいことだと？　なにを……あっ⁉）
膝行（しっこう）してさらに近づく身体。薄布に包まれた零の膝が御影の脚の間に入り込み、緋袴に包まれた膝は呪い屋の股間に入ってくる。
「ふぁ、うぅっ⁉」
「く、うぅン……ッ！」
緋袴に擦れる零の秘部、ストッキングに乗り上がる御影の肉畝。ヌチュ、と歪む割れ目に悦びが弾け、ふたりの美女は互いの身体を抱き締めて甘い吐息をこぼした。
「むさ苦しい野郎の手じゃあ、絵にならねぇ。あっちで必死に我慢しているＳＡＭＰのためにも、綺麗所のおふたりで乳繰り合ってくだせぇ」

操られた手がソロソロと上がり、御影の白衣の中へ潜り込んだ。指に触れる温かな重み。柔らかな丸み。絹地のような乳肌はしっとりと汗ばみ、掌に吸いついてきた。奥までみっしりと詰まった瑞々しい乳肉に、喰い込む指先が押し戻される。

「ああ、いけません、佐々木さん……ダメ、みなさんに見られて……」

「そ、そんなこと言ったって……ﾁｨっ！　手が、止まらねぇ！」

意思に反して動いた手が、柔らかな丸みを撫でながら左右に滑り、白い上衣の襟元を押し広げた。

ポヨヨン！

豊かな弾力を示して跳ね踊る双球。乳白色の乳肌が明るい陽射しを浴びて眩く輝き、胸先には熟しきったグミの実のように真っ赤な乳首がピクン、ピクン、と震える。

「ダメ、やめて……こんな、はしたない、ことぉぉ……あっ⁉」

羞じらうように顔を俯けたお嬢様の手が、零の乳房に下から貼りついた。

ギュウ！

黒シャツを破かんばかりに喰い込む白い細指。

「ふぁうぅっ‼　あぅ、く、うぅっ！」

握られた美乳に熱いモノが膨れ上がった。バネ仕掛けのように反り返ると、御影の太腿を跨いだ股間が緋袴に激しく擦れ、割れ目が圧し潰されて熱いモノが炸裂する。

（ち、畜生……っ！）

舞い上がりそうになった意識を懸命に引き留めたのに。

ムギュ、ギュギュギュゥ！

疋田に操られたお嬢様の指に、容赦はなかった。豊満な膨らみが手前に強く引っ張られ、薄布を突き破らんばかりの肉突起に御影の乳首が押し当てられる。

「はぅっ⁉　な、なにしてんだ、御影……やめ、クソ、く……ぁうぅっ！」

「佐々木さんこそ、こ、こんな、激し、くぅぅッ！」

互いの乳肉を引っ張り合い、自分の乳首に擦りつけるように動かすふたり。黒布越しに感じる御影の肉釣鐘は温かく柔らかく、若々しい張りに満ちていた。痼った乳首は互いの乳暈にめり込み、側面を摺り合わせて圧し潰し合う。左右の胸先に炸裂する快感。感じまいと歯を喰い縛っても、お嬢様の指に引っ張られた黒シャツに繊細な乳肌を撫で回され、乳麓までしごきまくられる。

（くそぉ、この程度で、こんな……くそぉっ！）

細い指先に揉み解された乳肉が、どうしようもなく蕩けていく。乳腺に熱いモノが溜まり、乳首を擦りつけられた胸先にはスパークが閃く。

これだけでも、恥ずかしさと肉悦におかしくなりそうなのに。

「ふたりともいい大人だ。オッパイだけじゃ物足りねぇでやしょう？」

『第八章　復習の淫謀』より

生温かな粘液が、気持ちよかった。火傷しそうに熱い肉コブが愛おしく、ふわふわと漂う精臭に意識が朦朧として、仔猫のように目を細めて頬を擦りつけてしまう。
「オチンチン欲しいって言ってみな。可愛く言えたらしゃぶらせてやる」
ズクン！
狂おしく疼く肉芯。
男根のたくましさを想像した唇が飢え、ドロドロした粘液を欲した喉が渇く。剛直に貫かれた尻孔や軍茶利梶に犯された膣は気持ちいいが、それだけでは物足りない。
「ほ……欲しいぃぃ……オチンチン、欲しいぃぃ」
卑猥な言葉を口走った女呪術師は、涙に濡れた頬に媚笑を浮かべた。甘く響いた己の声に昂奮をさらに掻き立てられ、身体の芯からカァッと燃える。男たちに挟まれた腰をくねらせ、ブレザーの前身頃から搾り出された乳房を揺らして、
「オチンチンぅぅぅ、ちょぉだぁぁいいぃぃ……」
いやらしく鳴いた。
「うは！　本当に言いやがった！」
自分で命じたクセに嘲笑ったチンピラは、赤黒く照り光る肉棒を零の鼻先にぶら下げたまま、いつまで経っても口を犯そうとしない。
「ちょ、ちょおだい、オチンチン、ちょぉだいよぉ！」

焦らされたせいで、余計に欲しくなってしまった。我慢できない。涙をこぼして身体を揺らし、

グチョグチョグチョ、グポグポグポ！

咥え込んだ男根に自ら秘部を擦りつけて、淫穴を淫らに鳴らす。捲れ返る排泄粘膜、蛇が絡みついたような淫茎に掻き出される大量の愛蜜。肉棒に挟まれて揉みくちゃにされた粘膜隔壁がクリームのようにトロトロになる。奔放に跳ね踊る乳房は自らの重みで捻れ、ブレザーの裂け目に喰い込まれた乳麓だけでなく柔肉の芯まで揉み解される。

風を切る乳首が心地よく痺れ、亀頭に突きまくられた膣奥に快感が弾けた。揺さぶられた子宮が煮え、タプンタプンと弾む双球が燃えるように熱くなり――だが、口に生じた疼きはいつまで経っても癒えなかった。

それればかりか、むしろ余計に強くなる。

「欲しい、欲しいのぉおっ！　しゃぶらせて、オチンチンをしゃぶらせてぇえええっ！」

涙をこぼし、涎を垂らして、幼子のように泣き叫ぶ女呪術師。

悶えれば悶えるほど淫欲は募った。跳ね踊る乳房が狂おしく焦れ、乳首が弾けんばかりに膨れ上がる。割れ目の端では硬く痼った淫核がジクジク疼き、一刻の猶予もない。

「オチン、チ、ンぅうっ！　うぅ、意地悪、しない、でぇえっ！」

駄々っ子のように身体を揺すりつつ、自らの手で胸果を揉みしだき、クリトリスを弄り

回す。男を跨いだ腰を擦りつけるように動かして犯された淫穴をグチュグチュ鳴らし、乳首を抓って悦びを貪る。

「そんなに欲しいのか？　しょうがねぇなあ」

グモッ！

喘ぐ唇に、横合いからたくましい肉棒がねじ込まれた。

「ンむぉっ!?　む、むンぷぉお……」

ズッシリした重みに圧し潰される舌、たくましい弾力にしごかれる頬粘膜。

（お、美味しい……舌が、蕩けちゃうぅうっ！）

口と肛門は長い肉管の両端だ。ペニスに犯された尻孔の悦びが、消化器官を這い登って口唇粘膜まで性感帯に変えていた。

「む、むぉ、む、ンちゅぅぅうっ！」

熱い牡肉をもっと強く感じたくなった女呪術師は、緩く捻れた淫茎に舌を巻きつけ、無我夢中で吸い立てた。唇を窄め、頬が凹むほど吸引すると、膣孔も肛門もキュウッと締まる。カリ首に密着する直腸粘膜、蛇が巻きついたような凹凸に吸いつく膣襞。

（あぁあっ！　で、でんき、がぁぁあっ！）

ペニスに触れた肉膜がビンビンする。

三つの淫穴に悦びが渦巻くと、自らの指で揉み捏ねた乳房が燃えるように熱くなり、桜

色に染まった乳谷に香汗が滲んだ。ピカピカと輝くほど張り詰める乳首、細指を押し返して痛いほど勃起する淫核。

「あはは、いいお顔！　ほうら、オチンチンはまだまだいっぱいあるわよ！」

グリリ、ムニニ！

双葉の声が聞こえた途端、頬にうなじに、熱い肉コブが擦りつけられた。鼻に絡みつく濃密な精臭。一息嗅いだだけで意識が痺れ、身体の芯が熱くなる。欲しい、欲しい、精液が欲しい――膨れ上がる牝の本能。

肉孔を出入りする二本の剛直や柔肉に押しつけられた肉塊は、荒々しく燃え盛る淫らな炎のようだった。炙られた柔肌が心地よく蕩け、骨まで気持ちよくなる。

「くぁう、あぁ、うぅうっ！」

男の腰を跨いだ女呪術師は、なにかに追い立てられているように激しく腰をしゃくった。

ぐちゅんぐちゅんぐちゅん！

肉棒に捲り返された淫穴から、大量の愛蜜が溢れ出してくる。炸裂する肉悦に弾かれ、背を捩ってよがり悶えれば、ブレザーの破れ目から搾り出された乳房が上下左右に跳ね踊り、喰い込む布地に乳麓をしごきまくられて、桜色に火照る柔肉に悦びが蓄積。

「さっきまであんなに生意気そうだったのに、すっかりチンポの虜だな」

「そうら、オッパイにもやるぞ」

たぷんたぷんと弾む乳房の側面に、赤黒く怒張した男根が擦りつけられた。
「むぁあっ⁉」
肉釣鐘に渦巻いていた熱い感覚が一気に沸騰。先走り汁を塗りつけられた乳肌が燃えるように痺れ、心地よい電流が乳腺を伝って双球全体に染み広がる。
ムク、ムククッ！
弾けんばかりに張り詰めた勃起乳首が、限界を超えてさらに膨れた。胸乳に満ちた昂りが、出口を求めて迫り上がってきたのだ。ピンピンに張り詰めた肉豆は小指の先より大きく勃起。それでもなお足らず、赤々と輝く乳暈が縁を際立てムクッと盛り上がる。
「見ろ、チンポ擦りつけられて乳首押っ勃てやがった！　とんでもねえ淫乱だな！」
嘲笑った男が己の肉棒を握り、先走り汁の滴を膨らました亀頭の尖端を——ぬちょ！
「めぁひぃいっ！」
乳孔から染み込む牡エキス。ただでさえ熱かった双球がグツグツ煮え、煮詰められたように濃密な香汗が乳谷に滲む。
（あぁぁ、ウズウズする、ウズウズしちゃうぅぅっ！）
乳房や尻や太腿が、激しい愛撫を求めて焦れた。汗ばんだ柔肌の裏側に小さな熾火が燻っているような感覚。ジッとしてなどいられない。
「むちゅうぅぅ、むちゅうぅぅぅッ！」

猫目に涙を溜めた女呪術師は、咥えたペニスをしゃぶりつつ、カクンカクンと腰を振り立てた。グジュングジュンと掻き回される膣洞に次々と弾ける肉悦。勇ましい亀頭に攪拌される膣奥、捻れた淫茎に揉みしごかれる壺口、Gスポット。剛直に貫かれた肛門が熱い。直腸が燃える。

（もっともっと……もっと、してぇえっ！）

淫らな欲望に突き動かされた身体が、キュウッと緊張した。

「うぉっ!?　なんだコレ、穴が締まって……くぅうっ！」

「チンポに絡みついてきた。おぉ、喰いちぎられそうだ！」

窄まる肉孔、波打つ粘膜。淫穴に男根をねじ込んだ男たちが気持ちよさそうに唸り、突き上げを速める。

（あぁ、イイ、イイよぉおっ！）

男の腰を太腿で締めると、胎内の肉棒をよりハッキリ感じることができた。グポグポと鳴る肛門に、ブシュブシュと愛蜜を噴く淫穴に、肉悦がとめどなく湧き上がる。蛇が絡みついたようなレリーフに膣襞が磨り潰されると小さな火花がパチパチ弾け、硬い亀頭で膣奥を突かれれば子宮が激しく沸騰する。二本の剛直に挟まれ、揉みくちゃにされた粘膜隔壁は、甘く痺れていた。ルビーのように硬く滑らかな亀頭でしごかれると強烈な電流が溢れ、際立ったエラや捻れた肉棹にしごかれると悦びの炎が燃え盛る。

タプタプタプ、とリズミカルにぶつかり合う乳谷にも、強張った男根を握り締めて狂ったようにしごき立てる手指にも、熱いモノが満ちてきた。

（オチンチンが、イイぃぃッ！）

どっしりとした重みが、猛々しい形が、火傷しそうな熱さが、喩えようもなく頼もしい。真っ赤な肉クサビを擦りつけられた頬が蕩け、グニュッと突き歪められた乳房もクリトリスのように気持ちよくなる。

オチンチンをもっと、熱い肉塊をもっと——淫欲に突き動かされた零は、

「ンもぁ、ンは……むちゅ！　むちゅむちゅ！」

ペニスを吐き出し、首を捻って、別の肉棒にしゃぶりついた。淫核や胸乳を弄っていた手をあげて顔の傍の男根を握り、激しくしごき立てて、たくましい弾力を愉しむ。

「獣人のチンポでなくてもいいのか？　節操のない女だ！」

穴に挿入られなかった男たちは零の頭を掴み、赤らんだ頬にペニスを擦りつけて猛る。香汗滲む耳裏に亀頭を押しつける者も、栗色の髪を手にとって男根をしごく者もいた。

（イィ、イイよぉおっ！　髪が、耳が、頬がぁあっ……！）

ホオズキのように赤らんだ頬をグニグニと揉む肉クサビ。汗ばんだうなじに擦りつけられる太い淫茎。耳裏を舐めて髪を梳く肉棒、汗の珠を浮かせた額に塗り込まれる先走り汁——逆巻く血潮に内側から炙られ、艶めかしい桜色に染め上げられた肌は、どこもかしこ

もクリトリスのように敏感だった。触れられた場所にスパークが弾け、揉み込まれた柔肉がビンビンする。擦り込まれた牡エキスに柔肉が燃え、息を吸えば青臭い牡香に脳芯が灼かれて、理性が掠れていく。

膣、肛門、乳房、乳首――掌、指、頬、うなじ――身体のあちこちに生じた波が混じり合い、熱く大きなうねりになった。遙かな高みに向け、一気に押し上げられる。

「くぉっ!?　なんだ!?　オマ○コが波打って……くぅっ！　おお、おぉおおおッ！」

悦びの声をあげた望月が、背を反らせて腰を突き上げ始めた。

グチョングチョングチョン！

おぞましく変形した巨根が零の肉壺を抉り、膣口を捲り返して愛液を掻き出す。

「ち、チンポが、揉まれるぅうっ！」

尻穴を犯している男も気持ちよさそうに呻き、仰け反った呪い屋の背にしがみついて激しく腰を使い始めた。菊門をグポグポ鳴らし、出入りする男根。

「ふもぁ、も、ンもぉおおっ！」

ブレザーに包まれた若い女体が、法悦の涙をこぼしながら伸び上がる。男を跨いだ腰は機械仕掛けのように激しくグラインドし、自ら上下に跳ねて、硬い肉棒の切っ先にポルチオ性感帯を打ち当てる。

ムク、ムククッ！

ミチチ、メキキッ‼

肉穴を犯した淫茎が、柔肌に押しつけられた亀頭が、太さと硬さを増した。

（ぁあ、来る、熱いのが、来るぅぅッ！）

膨れ上がる射精の予感。

太腿が震え出すほど力がこもり、淫棒を咥え込んだ双穴がキュウッと窄まった。肉棹を舐めまくる舌、しごき立てる両手。亀頭に突きまくられた乳房を揺らして跳ね踊り、昂る牡肉に全身で奉仕して――。

ビュクッ！　ビュククッ‼

ドピュドピュ、ビュルルルルッ！

ビュパ！　ビュパッ！　ビュビュパッ‼

突きつけられた男根から、煮え滾った白濁液が一斉に迸った。

熱い奔流に叩かれるポルチオ性感帯、背を駆け抜ける衝撃。

弾かれた意識が舞い上がり、眩い光が満ちる虚空へ打ち上げられて――。

「ふめぁっ⁉　め、めや、あぁあっ！　あふひぃぃぃぃぃぃ――――ッ‼」

ビクビクンッ！

大男の腰を跨いだ女体が鋭く反り返り、全身からぶわっと噴き出す香汗の霧。

「くぅうっ！」「おぉおっ！」

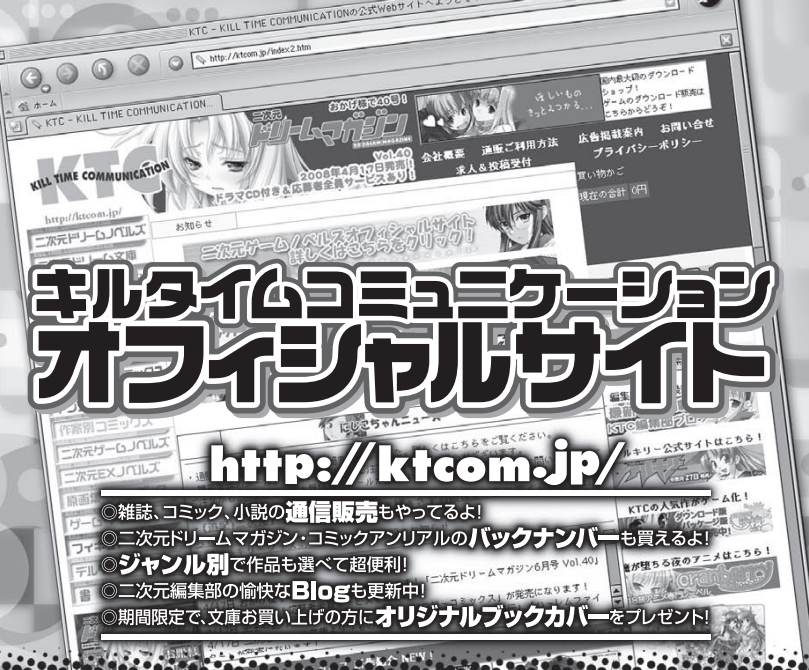
この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

二次元ドリームノベルズ屈指の超人気シリーズ
「呪い屋零」待望の最新刊、好評発売中！
新呪い屋零3
—淫夢迷宮—
ZERO
逆らえない、抗えない——！
淫らな暗示に操られるまま
痴態を晒す女退魔師!!
編集・発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
最新情報は公式サイトにて
ktcom.jp/



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

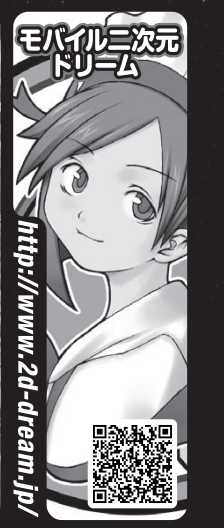
http://ktcom.jp/

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
- ◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!